

道徳の時間の進め方

1 道徳の時間の進め方

(1) 年間指導計画の作成

- ア 全体計画に沿って、道徳的価値の23項目（23時間分）をランダムに配置する。
行事等との関連は考えなくてよい。
- イ 学級（学年）の実態から、残りの12時間分の**重点項目**を選定してランダムに配置する。
- ウ 道徳授業地区公開講座の授業は、原則として年間指導計画に沿って行う。

(2) 道徳の授業の形態

- ア 一人ひとりがじっくりと考えられる形態（教室・校庭・特別教室、班等）
- イ 役割演技、動作化、劇化、イラスト化等の表現活動を取り入れた形態
- ウ TT等、複数の教員で指導・評価する形態
- エ ゲストティーチャーを招いて話を聞いたり意見のやりとりをする形態

(3) 道徳的価値と資料の選定

- ア 人間尊重の精神にかなう資料
- イ ねらいを達成するのにふさわしい資料
- ウ 生徒の興味、発達に応じた資料
- エ 多様な価値観が引き出され深く考えさせられる資料

読み物資料（名作、民話、随想、詩歌、新聞記事、作文、手紙、マンガ、自作資料、場面絵等） 視聴覚資料（写真、スライド、VTR、CD-ROM、録音テープ、心のノートや教科教材、具体物、アンケート結果の提示） パネルシアター、紙芝居、人形劇、影絵、ペープサート等 ※効果的な組み合わせ
--

(4) 資料の提示

- ア 読み物資料の提示は、ひとつの読み物をそのまま提示する場合、後半を袋とじにして隠したり、後で配布したりすることで、結論めいた内容を予め示さない方法がある。
- イ 読み物資料を教師が範読する際に、心が和むようなBGMを流す方法がある。
- ウ 導入で提示した写真等は、場合によっては終末まで提示したままにした方がよい場合がある。
- エ VTRは50分の時間配分を十分に考える必要がある。生徒が話し合う時間を圧迫してはいけない。
- オ VTRは読み直しができない。必要があれば、あらすじ等を印刷して提示する。
- カ いずれの場合も著作権、出典等に十分配慮する。
- キ ワークシートに1時間分の発問がすべて書いてある場合、個人で先に記入させないように指示をする必要がある。（皆で同じ発問で同じ時間に考える、他の人の意見を聞くことを大切にする）
- ク 情感を込めた範読を教員が行う。

(5) 終末のポイント

○「今日をよく考えることができたね。」「いろんな意見が出たね。」

これで終わってよい。

×「〇〇が大切なことが分かったかな。」「こうしなければいけないんだね。」

「今日からみんなでがんばっていこう。」

教科指導のまとめとはちがうので、留意する。

(6) 指導の基本的な流れと発問

	指導の流れ	資料・発問等
導入	◆ねらいとする主題への方向付け ・問題意識を引き出す ・資料の補説・雰囲気づくり	・明るい雰囲気을大事にし、答えやすい発問をする。一枚絵や教師の体験談による導入もよい。(×「思いやり」等の板書)
展開	◆中心となる資料の視聴・読み取り ・ 教員が範読 する ◆ねらいとする主題の追究 ・基本発問（中心発問を効果的にする） ・中心発問（多様な考え方・感じ方） ・補助発問（発言を受け止め、生かす） ◆発言の自由度（個性的発言）の保障 ◆自己への投影 ・各自の生き方に重ねて考えさせる 自分だったらどうするか（一般化） <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">教員が話をする時間をできるだけ短くする。</div> ◆説明の繰り返しをせず、イメージ重視	▽発問 ・発問を精選し、子どもの発言を幅広く。 ・主人公に身をおいて考えさせ、共感を促す発問も大事にする。 （×「なぜか」の繰り返し） ・必然性のある共感的発問になるようにする。 （×「～の気持ちはどうか」の繰り返し） ▽発言 ・無理に挙手させない。指名でもよい。 ・ワークシートを活用する。 ▽発言へのリアクション ・なるほどね。 ・～さんはそう考えたんだね。 ▽話し合い活動 ・他の人の意見を聞く雰囲気を重視する。 ・班で意見をまとめることはしない。
終末	◆ねらいとする主題について余韻や思考の継続を促す	・印象に残る、端的な終わり方をする。 ・理解や決意を求めない。

(7) 発問「1時間に2～3つ 考えやすい発問を最初に、中心発問は後段に」

①発問＝ねらいとする主題（道徳的価値）へ迫るためにたいへん重要である。

平易な言葉による発問がよい。（発達段階や個性への考慮）

行間を読み取らせる発問がよい。（×資料に書いてあることを見つけさせる発問）

本時のねらいに即した発問がよい。（**心情・判断力・実践意欲・態度**）

発問に対する答えが3つ以上あるものがよい。（多様な思考・多様な意見）

中学生＝**価値の確認よりも、正しいと分かっていることがなぜ行動に移せないのか考えさせる**

②補助発問

ア．焦点を絞り込む発問 イ．比較させる発問

ウ．理由や背景を聞く発問 エ．掘り下げたり再考を促したりする発問

オ．ちがう面やちがう角度から考えさせる発問

・架空の事態「もし生まれ変わるとしたら」

・人生の節目「卒業して中学生になった時」「就職して社会人になった時」

・現実的な葛藤場面「ケンカに出くわしたら」

「テストがあと1問、でも体調が…」

・より高い段階の反応を引き出す「すべての人がその考えで行動したら」

・役割取得を促す「社会全体から見たら」「主人公だったら」

(8) 板書

- ①縦書きを基本とする。
- ②資料のタイトルを書く。内容項目は書かない。
- ③発問と生徒の意見や考えを書いていく。(最後に振り返りができるように)

(9) 道徳の授業における教員のスタンス「教科指導とはちがう自分に」

一人一人の考え方・感じ方を大切にする。

生徒とともに考え、悩み、感動を共有する。

道徳的価値に気づかせ、その意味や大切さについて考えさせる。

▽教科とはちがう風土を担任が醸成する

- ①「正解がないこと・個は個でよいこと」の説明
- ②「結論づけがないこと」「説教にならないこと」「まとめないこと」の実践
- ③「資料があること」の習慣
- ④「十分に感じ取る時間」の保障
- ⑤「感動の共有」「葛藤の疑似体験」のしくみ

第1学年 道徳学習指導案

- 1 学 級 第1学年2組(40名)
- 2 主 題 4-(3) よりよい社会の実現 主題に合った資料・発問
- 3 授業者 教諭 ○○○○
- 4 資料名 「みんなで生き方を考える道徳1」 日本標準教育研究所
マナー川柳 マナーについて考えよう
- 5 本時の授業 主題に合った目標・道徳の時間の目標

(1) 目標

- ①マナー川柳を通して、社会生活で守らなければいけないマナーがあることを考え、マナーを守ろうとする心情をもたせる。
- ②友達のつくったマナー川柳を聞き、マナーを守れない自分の弱さに気づくとともに、よりよい社会を実現するための判断力を高める。

(2) 展開

電車に限らず守らなければならないマナーを生徒がどう感じているか。

	学習活動	予想される生徒の反応	指導上の留意点
導入	●マナーの問題で不快な思いをした教員の体験談を聞く。	●「たいへんだったね。」 「自分もそう思ったことがあるよ。」	●電車等で目にする機会が多いマナー川柳に興味をもたせる。
展開	●資料「マナー川柳」の教員の範読を聞く。	●「電車の中で見たことがある。」	●あまり細かく説明をしないで、想像力と体験の想起を促す。
	活動が多すぎると、学活のねらいにすり替わってしまい、自己を振り返る機会が減る。		
	●ワークシート1：自分も体験したことがある川柳を選ぶ。	●「けっこうあるね。」 「電車には乗らないけど、路上でもあるね。」 「自分がやっちゃったこともあるよ。」	●友達と川柳を見せ合うことで、体験を共有できるようにする。 ●他人に受けたマナー違反だけでなく自分が行ったマナー違反にも目を向けさせる。
	●ワークシート2：学校内・学校外に分けてマナー川柳をつくる。 ①個人で考える。 ②班で考える。 ●各班の発表を聞きながら、ワークシート3：他の人の川柳で、なるほどと思ったものを記入する。	●「川柳にするのはむずかしい。」 「他人のことは言えないなあ。」 ●「自分も注意しないとイケないかな。」 「そういえばそうだということもあったね。」	●自分が不快な思いをしたことをきっかけに、マナーについて考えたときを思い出させるようにする。 ●各班からマナー川柳を四首選ばせる。 ●各班の発表を聞いて、自分の考えを深めさせる。
終末	●マナー川柳はなぜ必要なのか、マナーを守れない自分について考える。	●「マナーを守らない人が多いから。」 「誰かがやっているといい。」	●マナーを守れない自分の弱さとマナーの必要性に気づき、それを守ろうとする心情を養わせる。

- 6 評価 社会生活に必要なマナーを守ろうとする心情をもつことができたか。

【道徳授業地区公開講座での略案】 保護者・地域の方にも分かりやすく

